ピアノ初心者へのピアノ実技指導に関する一考察

練習意欲維持のための試み

鈴木　由美子

Study to make it possible for people who learn piano for the first time
Attempt to maintain the motivation of students' practice

Yumiko SUZUKI

教育　音楽　初心者　練習　保育

１．はじめに

幼稚園教諭及び保育士養成校においてピアノ演奏技術や弾き歌いを学ぶ音楽授業の目的は、教員、保育士として現場に出てから生かすことのできる基本的な音楽技術と５領域と言われる「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」を音楽によって体現すること、そして子ども達への歌唱指導のための技術を身に着けることにあると考えられる。また、学生にその職業的技術のみならず、教諭、保育士としての意識、自覚を育てることも含まれている。

限られた授業時数、短時間の個人レッスンの中で、入学時音楽経験がない或いはそれに等しい初心者にとって、その技術の習得は困難を伴うことが多い。その困難の一つに成果を得るための継続的な「練習」がある。

入学時、ピアノや弾き歌い修得への不安はあっても、諦めている学生はいない。それにも拘らず、年次が上がるとモチベーションが下がり、練習を回避したくなる。ピアノは弾ければ楽しい。しかし、それには練習をしなければならず、そのモチベーションを維持し結果に結びつけていかなければならない。

本研究では、保育士及び幼稚園教諭に必要なピアノ演奏技術習得のための練習意欲を維持していく為に必要と考えられる方法を考察し、各個人に適した目的と目標の設定、筆者が行った練習方法の組み立てを検討した。

２．先行研究

初心者のピアノ演奏技術習得については、大変多くの研究が存在する。

入学時の学生のピアノのレッスン経験についての現状把握も行われ、入学時ピアノ未経験者が年々増加していることがわかる。「入学時にピアノの演奏経験が全くない学生や初級者が大半を占める」（小森 ,2010,p.51）「新入生の約４割は、ピアノのレッスン経験が一度もないことがわかり、入学後のピアノ実技調査結果から経験ありと答えた者の多くも初級程度であることがわかった」（平松 ,2011,p.45）「学生のピアノ学習歴について、A 大学短期大学部では、入学時点でピアノ初心者の割合が、ピアノの経験が『全くなし』と『3 年未満』を

合わせると全体の70％にも及んでいた」（諸井,2015,p.82）とある。

意欲を向上させるためには、「『ピアノを演奏することが楽しい。』と学生に感じさせ、興味・関心を持たせることこそ学生の学習意欲を高める即効薬になると考え、学習意欲を高めさせる教材選択や指導法の工夫を研究している。

学生が、音楽への興味・関心を持てるよう、学習意欲を高められる曲、音楽的に美しい曲、そして、教育・保育現場に有効な教材を選曲して、学生の学習意欲をかき立てる学習内容を考える必要があるだろう」（小森,2010,p.51 p.52）「長時間の自習で『やる気』を継続していくためには、学生自身がより取り組みやすいと感じる教材で学ぶことが必要であると考える」（平松,2011,p.49）このように教材や指導法の研究によって学生の学習意欲への外的要因からのアプローチがされている。

別の視点から中村浩美は次のように述べている。「レッスンの中で、ただ保育者になりたいだけでなく、どんな保育者になりたいのか、そのためにどのような努力が必要か考えるように促している」「保育者を目指して入学してきた学生が退学や休学をせず、意欲的かつ積極的に学ぶ姿勢を持てるよう、個人の性格を早く把握して一人ひとりに見合ったレッスンをしていきたい。中略　それぞれの性格の違いを見極める事もレッスンの成果に繋がるとも考えられる」（中村,2015,p.54 p.56）学生の性格や感じ方の個性を把握し、内的な働きかけも見られた。

3．仮説

学生の練習意欲低下の原因を教材に求めるならば、その教材を使用している養成校ごとに意欲の差が出てくるのではないだろうか。指導法については、その教材の中の曲に対しての○×ではなく、その教材を使って現場で使える音楽技術を習得することが目的なのであるから、先ずは教員の認識を整えることが大切であると考えている。

筆者は、教材などの外発的動機づけから学生の意欲向上、維持を目指すこともさることながら、学生の意識を変化させ意欲を維持する内発的動機づけのための具体的な方法を見出したいと考えた。

意欲低下の原因を、学生の内的要因である漠然とした「不安」と外的要因であるピアノレッスンに対する「不安」の相互作用に起因すると仮定し、その原因を探ることで練習意欲維持への働きかけが導き出されるのではないかと考えるに至った。

4．調査方法

現状把握のために、平成27年4月入学筆者担当学生17名及び平成26年4月同21名、計38名に対し、平成27年4月第1回目の授業において聞き取り調査を行った。この時点で、平成26年入学者は1年間のピアノの授業を受けているが、その練習へのモチベーションの維持において下降傾向があるため、含めて調査を行った。

その質問内容は、平成27年入学者には、ピアノのレッスン経験、そのほかの音楽経験、所有楽器について、練習環境においては毎日

の練習時間確保の可能性を、そしてピアノのレッスンに対しどんな気持ちでいるかを、平成26年入学者には、入学前ピアノ経験の有無、その他楽器の経験、所有楽器について及び練習頻度、自分の練習方法が確立されているか、現時点で自分の抱えている問題点についてであった。

5．調査結果

平成27年4月入学 筆者担当学生数17名

a. ピアノのレッスン経験について

経験なし　4名

3か月から半年　4名

過去に経験あり（レッスン形態、期間定めず）　9名

b. ピアノ以外の音楽経験

（楽器 合唱等すべて含む）　有　8名

c. 所有楽器　（複数回答有り）

電子ピアノ、キーボード　8名

エレクトーン　4名

ピアノ　7名

d. 練習環境（時間の確保）　可能　17名

e. ピアノの授業に対し

どのような気持ちでいるか

緊張しやすい　17名

弾けるようになるか不安　13名

何をするのか　2名

経験者との差　1名

平成26年4月入学筆者担当学生数　21名

a. 入学前ピアノ経験の有無　無　10名

有　11名

b. ピアノ以外の音楽経験　有　6名

c. 所有楽器（複数回答有り）

電子ピアノ、キーボード　15名

ピアノ　6名

d. 練習頻度　毎日　0名

決めていない（できるときにやる）9名

概ね決めている　12名

e. 自分なりの練習方法を持っているか

持っている　10名

持っていない　11名

f. 現時点での自己問題点

ピアノは何とか弾けるが

弾き歌いになると歌が歌えない　4名

手が回らない　1名

指使いが自己流　1名

楽譜を読むのに時間がかかる　3名

音は読めるがリズムが苦手　3名

歌うとき音が外れてしまう　1名

6．考察

入学時初心者は、両学年とも約半数に及んだ。ただ、経験者であっても小学生の頃数か月ほどであったり、高校の選択音楽の保育コースでの経験であった。その回答をした学生自身が「初心者と同じ」と考え、「基礎から学びたい」という希望を持っていた。これは、初心者も僅かではあるが経験を持つ者も「幼稚園教諭、保育士として使えるピアノの基礎」から学びたいという意欲があると考えられた。

平成27年度入学の筆者担当学生は、全員が何らかの楽器所持し、練習に対する意欲があった。但し、設問d.に対しての結果については、その時点ではこう答えるしかないだろうと推測された。しかし、毎日の練習が必要であることを学生に認識させるためにこの設問は必

要と考え質問した。最後の「ピアノの授業に対してどのような気持ちでいるか」に対する全回答の根底にあるものは「不安」であろうと推測した。

その「不安」の原因を、学生の性格や感じ方にある内的要因と、初めてのピアノレッスンという外的要因に分析し、不安を少しでも軽減し意欲に転換するには、内的要因の不安へは教員のレッスン内での受容と共感、タイムリーな言葉かけ、やらなければならないことを具体的な形で伝達することが必要であり、外的要因の不安には、受容とその要因に対する具体的で段階的な練習方法の指導が有効であると考えた。この場合の教員は指導者よりも、学生自身が目指す目的に必要な技術を持ちそれを伝える「協力者」「支援者」の役割を持つ必要がある。

平成26年度入学の筆者担当学生も、全員入学時から何らかの楽器を所持していた。ただ練習頻度はかなり低く、概ね週1~3回の学生が多いと考えられた。その理由については、アルバイト（経済的な事情）や他教科の宿題を理由に挙げる学生があった。設問eの練習方法の確立については、1年次に器楽Ⅰを履修し課題をこなしているため、確立されていることを期待して設問した。幼少時に受けたピアノのレッスンの練習方法を保持している学生や1年次に具体的な指導を受け、確定的ではなかったが目的に沿った自分に合う練習方法を持っている学生もいた。1年次からあまり練習をしなかったといった学生は、4月の時点で読譜ができず、練習は何をしたらよいか理解していなかった。

各自が考える自己問題点については、「歌だけだったら歌うことができ、ピアノだけだったら何とかなるが両方となるとうまくできない」（弾き歌い）「音は何とか読めるがリズムがわからない」（読譜）「指使いが自己流になってしまう」（ピアノ演奏技術）と多岐にわたった。

この結果から、目の前にある曲は何とか弾いても、その根本である自分に合った結果を導くことのできる練習方法が身についていないため、このような問題を抱えてしまっていると考えられた。レッスン時に学生が持ってきた曲をただ〇か×で判断するという考えで学生のレッスンをしていると、学生がどのような練習をして曲をもって来ているかを見落としてしまう。過去において、熱心に練習してきていたが、実は全く楽譜が読めず、聞き覚えでひたすら暗譜をして弾いてくる学生がいた。「よく弾いてくる」「熱心である」と褒められてきた学生は、使用教材の途中から意欲をなくしてしまった。理由は、弾けなくなってしまったからである。なぜ弾けなくなったか。弾き歌いが始まり、ピアノ伴奏と共に歌を歌うようになった時、暗譜の限界が来たのだろうと推測した。この場合、もっと早い段階で気づくことが必要だったのではないだろうか。

7．外的要因の不安を解消するための練習方法の提示

先に述べた内的要因による不安の解消については、そのレッスンの中で教員と学生がコミュニケーションをとることで対応し働きか

けることができるが、外的要因に根差した不安に関しては、その行為と結果の因果関係を理解できるような具体的な練習方法の提示が有効ではないかと考えた。また、学生の努力に対する賞賛は惜しまず、身体面、精神面も含め常に観察を怠らないように努めることも必要であろう。

筆者が初心者に対して指導している練習方法とその目的を表１に表す。

※ピアノが弾けるようになるための練習でありながら、「読む」「歌う」ことを多く取り入れている理由は、声に出して「読む」ことで楽譜に早く慣れることができることと将来的に出てくる「弾き歌い」への準備のためである。言葉ではなく音名唱ではあるが、手元の鍵盤ではなく楽譜を見ながら弾くことを身に着けることも含めて、「弾き歌い」はピアノ実技と歌うことをバランスよく学ぶことが好ましいと考えている。

表１「行為と結果の因果関係を理解できるような具体的な練習方法の提示」

練習内容(手順)	方法	目的	理由
1,いきなり弾こうとせず、先ず楽譜の全体像を眺め、特徴を把握する	楽譜を見ていく。 ピアノの前で行わなくてもよい（通学電車等で可能）	曲のつくりや拍子、長さ、調号の有無、弾きにくそうなところを見つける	楽譜を理解をしてから練習した方が仕上がりが早いと考えられる
2,同じ或いは似た場所を見つけ印をつける	右左それぞれを２或いは４小節の楽節で見ていき、同じ、少し違う等色分けしていく	メロディやリズム、和音の反復に気付く	音楽は反復の芸術であるため、同じ場所を見つけることで練習がしやすくなる
3,左手のリズムを読む（事前にリズム唱の指導は必要）	２或いは４小節単位でリズム読み。どちらかの手で拍子をとり、空いた手で読む場所を指差す スムーズにできるまで反復する	その曲の拍子とリズムの関係をつかむ	声に出す事で理解度の確認ができる レッスンの中で教員と共にリズム読みをすると自宅で自発的な練習に結び付く
4,今読んだリズムに合わせてゆっくりと音を読む（歌わない）	単位は同じだが音名で読む　拍子は必ずとり読んでいる音を指差す 曲らしく読めるようになるまで反復する	拍子、リズム、音の相互関係をつかむ 書いてある音名がきちんと読める事	読めないものは弾けない。音読することで耳からの理解もできる。 教員と共に行うことで手順を覚えていく
5,音を読みながら左手を弾く	声で拍子を感じられるように読む ※指使いに注意する	読んだ音と実際の音、左手の動きを連動させる	読みながら弾くことは理解したことを実現化すること

練習内容(手順)	方法	目的	理由
6,右手で3～5を行う（ただ右手は旋律であることが多いので読むよりは歌う）	拍子を感じられるように歌う指使いに気を付ける	左手の時と同じ	声を出し歌うことに慣れる　音名唱をピアノと共に行う事で音程が安定する また反復練習をすることで、読んでいる音と弾いている鍵盤の音高の違い（ミス・タッチ）が分かるようになってくる（緩やかではあるが音感が付いてくる）
7,左手を弾きながら右手パートを歌う（ゆっくりと）	左の何の音と右が合うのか確かめながら行う	弾く、歌う、合わせる事を確認する	いきなり両手で弾くよりも、この一段階があった方が合わせられるようになるまでの時間が短縮されることが多い
8,左手を弾きながら右手パートを歌い、右手を弾く（両手で弾きながら右手を歌う）	練習２で付けた印を目安に少しづつ弾いていく。弾いてからミスを修正するのではなく、弾く前に次に何の音を弾くのかを考えて楽譜を見るようにする（歌っていれば自然とできるようになる）	曲を完成させる 両手で弾きながら音名で歌うことに慣れる	弾き歌いに繋がる
9,右左を合わせる（歌わない）	その曲の速度、強弱などにも配慮をする	完成させる	音名唱をしないことでピアノ曲となる 速度、強弱、演奏記号にも留意できるようになると表現の幅が広がる

8．結果

筆者は、上記の項目のいくつかを、必ずレッスンの中で学生と「共に」行うようにしていた。また、今やっていることが直近では何に繋がり何ができるようになるのか、少し先に出てくる課題のためにどのような布石となるのかを必ず説明した。また、現場の幼稚園保育園でどのように生かしていかれるかを伝えた。

4月の時点で一つ一つの項目をこなしていく為にはかなりの時間を要し、学生たちは大変なようであった。筆者は、学生が一人でこれらの練習を実行していくのではなく、同じ授業クラスの仲間と一緒に行う、或いは相談しながら復習できるように仲間作りを行った。実際、「難しい」「大変」という言葉は聞こえたが、「一緒に頑張ろう」と励まし合う姿も多く見られた。同じ目標を持つ仲間がいる事で、筆者への質問もしやすくなった様であった。

また、苦しくなった時の練習を、予習ではなく復習の位置に置き、レッスンの中で新しいことを学び、練習内容はそれを復習し応用するように切り替えると、一段階上がってできるようになった喜びと達成感から、再びモチベーションを持ち直すことができた。入学から9か月経った現在は、初心者の学生が自分から練習に向かうようになり各々に成果を上げられるようになった。また学生自身が「練習をしていないので弾けない」「きちんとした練習をすれば必ず弾けるようになれる」という自己受容ができるようになっていた。

学生の練習意欲維持のために行った「行為と結果の因果関係を理解できるような具体的な練習方法の提示」は大変有効であったと言えよう。

9．各個人に適した目的と目標の設定

保育士、幼稚園教諭として身につけなければならないピアノ実技のための練習方法を理解し実践していく過程で、理解力と指を動かす力には大きな個人差が出てくる。特にピアノの場合は、「分かっているけれど指が動かない」という現象が起こる。頭での理解はできていても指先への指示と連動ができず、思うように弾けない＝練習成果が表現できない学生がでてくる。その場合はどのように対応するか。

筆者は、養成校でピアノを学ぶ意義は現場に対応するためだけでなく、学生自身が大人になってから初めて学ぶ難しさや苦しさを体験し、また自分なりにやり遂げる事で、今の自分にできないことに挑戦している子どもの心を理解し、寄り添うことができるようになるのではないかと考える。学生にそれを伝え、目的を「最後までやり遂げる」ことに置き、自分のペースを作ってレッスンに向かうように指導をした。

結果、「現場に必要な音楽教育技術の為に努力をする」だけではなく、先ず「自分のためにできる努力をする」ことが伝わり、レッスンに向かう気持ちが少し楽になったようであった。その努力を見ていた同授業内の学生が、自発的に声を掛け合い学ぶ様がみられた。

まとめ

ピアノのレッスンは、とかくその教員の体験を基に行われることが多い。そして養成校においては、ピアノ初心者に、限られた時数の中で音楽教育技術として身に着けてもらわなければならない。そのためには、やはり外的要因である教材や指導法の研究は不可欠である。しかし、それ以上に学生の内的要因を持つ「不安」を理解し、軽減のために働きかけることも重要である。その働きかけとして、レッスンでの教員から学生への受容と共感、具体的で

段階を踏んだ練習方法の指導が有効であった。

櫻井茂男（1956）よると、学習意欲を育てるためには①基本的生活習慣②手本になる③有能感を育てる（学習内容を理解させる）④自己決定感（自発性）を育てる⑤他者受容感（周りからの受容）を育てることが必要とされている。この言葉をピアノの授業に置き換えれば、①練習習慣②教員や友人の演奏を聴く③レッスン内での言葉がけとポイント練習④自発的に練習に取り組む⑤周りから自分の努力を認められることと考えられる。カリキュラムを無難にこなし、目の前の楽譜を弾いて可か不可かの対応になっては、練習意欲を維持することは難しいのではないだろうか。

筆者は、今後も学生たちにとって分かりやすく、限られた時間の中で効果の出る練習方法と働きかけを模索していきたい。

＜引用文献＞

平松愛子
　近畿大学九州短期大学研究紀要（2011）
　ピアノ学習の意欲が向上する指導法について～１年次前期の取り組みから～
小森光紗
　埼玉純真短期大学研究論文集第３号(2010)
　学生の学習意欲を高めるピアノ教育の一考察
　―J.ブルグミュラー「25の練習曲」の指導を通して
諸井サチヨ
　淑徳大学短期大学部研究紀要第55号（2016）
　保育者養成校での「弾き歌い」指導に関する一考察～学生のピアノ技能に関する実態調査を中心に～
中村浩美
　長崎女子短期大学紀要第39号（2015）
　保育者養成校における音楽指導法の研究

＜参考文献＞

桜井茂男
学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる，誠信書房（2006）
山本正夫　音楽教育史文献・資料第九巻
歌唱教授法通論　株式会社フリオール（1991）
石井恵子共著　幼稚園教諭・保育士養成課程
幼児のための音楽教育　教育芸術社（2010）
厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育科　保育所保育指針解説書（2011）